

# Studies in Holistic Education/Care

2019 / No.22

# ホリスティック教育/ケア研究

2019年 第22号

ホリスティック教育/ケア研究 2019年 第22号

日本ホリスティック教育/ケア学会

## Reports:

Report on the Second Conference of Japanese Society for Holistic Education/Care  
 ..... NARITA Kiichiro/TAKAHASHI Kazuya/SOGA Sachiyo  
 KONO Momoko/YOSHIDA Atsuhiko

## Articles:

Transversales of learning : Gilles Deleuze's idea of the whole ..... MATSUE Takuo

Relationship and Silence :

Application of Japanese Traditional Dance to Care Work  
 ..... BANDO Kazuharu/BANDO Miyu

A Study on Education rooted in a 'Compassion' for 'weakness' :

Based on Simone Weil's Concept of 'Malheur' ..... IKEDA Hanako

Reconsidering the Contemporary Significance of Assessment Criteria on the Theory of  
 Formative Assessment :

Toward the Implementation of "Deep Education for Sustainable Development"  
 ..... NISHIZUKA Kohei/ARIMOTO Masahiro

Formen and Mindfulness :

Analysis of Formen Drawing by Electroencephalogram Measurement  
 ..... YAMASHITA Kyohei/ITO Gen/TOKUNAGA Eiji

Perceptive change occurred in child care taker through diaper change :

Focus on responsive relation between infant and child care taker  
 ..... KAMIYA Yoshie

## Practice Reports:

Multicultural Education Program Incorporating Viewpoints of Caring :  
 With Children under Severe Learning Environment ..... SOHN Mihaeng

## Research Reports:

On John P. Miller's *Whole Child Education, Love and Compassion*, and other works  
 ..... NAKAGAWA Yoshiharu

## 報告

第2回研究大会報告  
 今ここからホリスティック教育/ケアの可能性を探る  
 ——自由学園シンポジウムに寄せて

..... 成田喜一郎・高橋 和也・曾我 幸代・河野 桃子・吉田 敦彦

## 論文

学習の横断線—ジル・ドゥルーズの全体性の思想— ..... 松枝 拓生

つながりを生む「沈黙」—日舞の型をケアへ— ..... 坂東 和治・坂東 光有

「弱さ」への「共苦」に根ざす教育に向けた一考察

——ヴェイユの「不幸」論を手がかりに ..... 池田 華子

形成的アセスメント論におけるクライテリアの今日的意義

—「深いESD」の実現に向けて— ..... 西塚 孝平・有本 昌弘

フォルメン線描とマインドフルネス—脳波測定を通じた分析—

..... 山下 恭平・井藤 元・徳永 英司

おもむつ交換を通じた保育士の保育観の変容

—保育士と乳児の応答関係に注目して— ..... 神谷 良恵

## 実践報告

ケアリングの視点を取り入れた多文化共生教育

——学びの環境が厳しい子どもたちとともに ..... 孫 美幸

## 書評

『ケアの根源を求めて』 ..... 守屋 治代

『社会変容をめざすESD——ケアを通じた自己変容をもとに』 ..... 成田喜一郎

『シュタイナー教育思想の再構築—その学問としての妥当性を問う—』 ..... 河野 桃子

『実践と理論を架橋・往還する「珠玉」のコンテンツ/スキルへの誘い  
 子どもと教師の学びの拡張と深化をもたらす』 ..... 孫 美幸

## 研究動向

ジョン・ミラー『ホール・チャイルド教育』と『愛と慈悲』

その他の未紹介著作について ..... 中川 吉晴

書評 衛藤吉則著

『シュタイナー教育思想の再構築  
——その学問としての妥当性を問う』

(ナカニシヤ出版、2018年)

河野 桃子 信州大学

KONO Momoko

本書は、著者による約25年間のシュタイナー研究の成果として、著者の学位論文を中心にまとめられたものである。本書の構成は、「はじめに」と「おわりに」を除く全6章と2つの補論から成っている。まず初めに、本書の概要について簡単に確認しておきたい。

最初の2つの章（第1・2章）では、シュタイナー教育思想の成立背景と実践の特徴を踏まえた上で、その教育学上の位置づけをドイツの改革教育運動との関係から明らかにしている。続く2つの章（第3・4章）では、シュタイナー教育思想をめぐる争点の1つである人智学的認識論の科学性についての議論を整理した上で、その構造を、哲学上の「共通言語」を用いて検討している。次の2つの章（第5・6章）では、人智学的認識論を構築する上でのシュタイナーの哲学的な格闘を詳述し、その認識論の現代的意義を読み解くための新たなパラダイムとして、「現代的ホリズム」を提示する。最後に2つの補論では、シュタイナー教育思想の日本での受容と、ナショナリズムとの相違について論じている。

シュタイナー教育における理論と実践の分断については、しばしば指摘されるところであり、両者の架橋を目指す試みは数多い。本研究もまた、とくに人智学的認識論に焦点化してその思

想を「特殊性」のレッテルから解放し、実践の受容に反して理論が敬遠されがちな現状に一石を投じるものとなっている。評者が本書から刺激を受けて考えたことは様々あるが、ここではとくに本機関誌の特性とも重ねつつ、本書後半で、シュタイナー教育思想を現代の文脈で読む上での新しいパラダイムとして提示される、「現代的ホリズム」について述べてみたい。

本書のなかで「現代的ホリズム」という言葉は、実証科学の限界を超えた現象を有意味的に解釈する理論枠組みを模索する、1970年代からの自然科学者による取り組みを指しており、代表的な論者として、プリブラム (Pribram, Karl H.)、ボーム (Bohm, David)、ウィルバー (Wilber, Ken)、バティスタ (Battista, John R.) らの名前が挙げられている (162-164頁)。著者は、この「現代的ホリズム」の立場について、バティスタの「全体論的 (holistic) パラダイム」を取り上げつつ、以下のように説明する。

この理論枠組みにおいては、時空は完全に開かれ、一切の区切りは実体的でなく、機能的・暫定的なものとして理解される。[...] すなわち、ここでは全体として唯一のリアリティを備えた唯一の実有が存在し、そこに精神 (Geist) や死をも包み込む上昇的で円環的なヒエラルキーが構

成されるのである。ここにおいて認識の壁は一時的なものとして、認識主観の高進の程度に応じて存在のリアリティは開示されていく。(166頁、[]内は評者による)

著者自身が第3章で詳述しているように、しばしば「科学的か否か」といった観点から賛否を論じられ、双方の主張がかみ合わないことも多いシュタイナー教育思想に対し、「垂直軸」の方向(161頁)や認識範囲の変容の可能性までも自然科学の地平で論じる「現代的ホリズム」のパラダイムは、確かに、そうした平行線の状況を超え、有効な対話をもたらす可能性を期待できるものである。しかし他方で、評者には以下の二点についての疑問も残された。1つは、「現代的ホリズム」との連結が、どのような意味でシュタイナー思想の現代的な解釈への助けになるのかが見えにくいという点。もう1つは、シュタイナー思想には「現代的ホリズム」に区分される思想とは食い違う面があるのではないか、という点である。

まずは、前者について。著者は、シュタイナーが、科学と神秘主義が「同じ道の別の姿」と主張するにも関わらず、それらを架橋する具体的な理論やパラダイムの提示に至っておらず、それらの整合的な理解が、究極には各人の個別な内的体験(追思考)に委ねられるという点を批判的に見ており、この点を克服するため、「その今日的意義を一般に解説できる理論枠組み」としての「現代的ホリズム」を提示する(170頁)。しかし、上記の批判点を「現代的ホリズム」がどのように乗り越えているのかについて、十分な説明はなされていないように思われる。確かに、このパラダイムにおいては、経験的認識から超越論的存在認識への架橋が、上に引用したような「認識主観的存在論的変容プロセスとして解説される」という指摘はなされるが(171頁)、こうした解説であれば、上記のシュタイ

ナーによる、「追思考に委ねられた架橋」を超えるとは言い難い。シュタイナー思想をあえて「現代的ホリズム」のパラダイムで理解するとき、単に両者が共通する志向をもつというだけでなく、そこにどのような意義が見出されるのか、また、そうすることがどういった意味で人智学的認識論を「先駆的な教育学理論に位置づく可能性」をもつものとして理解することにつながるのか、より詳細な説明が求められると考える。

次に、後者について。例えば、先のバティスタは、「全体論的(holistic)パラダイム」で世界を捉えるとき、「どんなものにせよその絶対的な原因をけっして知りえない」と明言しているという(165頁)。こうした考え方は、不可知論を拒否し、それに対抗する形で自身の思想を構築していったシュタイナーの思想とは、完全には重ならないところである。「ホリスティック」に限らず、1つの言葉である立場を形容する場合、その内部の多様性が覆われてしまうということはよくある。「ホリスティック」であると語られる立場の内の違いや多様性を言葉にしていくことは、本機関誌に関わる我々にもまた問い返される課題であるだろう。「現代的ホリズム」とシュタイナーの立場の間に見られる、例えば上のような相違について、著者はどのように捉えているのか。さらに詳しい論究がまたれる。

ここまで話を本学会に関連の深いテーマに限って見てきたが、本書の功績は、その他に、シュタイナーの教育思想を、カント、ハルトマン、フィヒテ、ヘーゲルの思想や、改革教育学運動、精神科学的教育学(ディルタイが構想した精神科学(Geisteswissenschaften)を基盤とする教育学のこと。シュタイナーの思想を指すGeisteswissenschaft(精神科学=霊学)と名称は近い(原語では複数形か単数形かの違いしかない)が、別の系譜に属する。詳しくは、西平

直『シュタイナー入門』講談社、1999年、166-167頁を参照のこと。)といった、多くの思想や実践とのつながりのなかで解釈したことにも認められる。これらの人物や運動には、当然ながら、それぞれ専門に論じる研究者がいる。本書をきっかけに彼らとの対話が生じれば、シュタ

イナーの思想がそれぞれの専門的な視点から捉え直され、その理解がさらに多角的に深まっていくことになるだろう。こうした対話への契機を与えてくれたことに対しても、本書の刊行に大きな喜びと期待を感じている。